

大弾正忠帝国海軍
士官学校編

弾正忠信長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、太陽系から遥かに離れた星での物語である。

この星の生物には、体内に心力（じんりよく）と呼ばれる生命エネルギーが流れており、これは、傷の治癒や病気の回復を増進させ、また、生命力を大幅に上げるものでもある。

そのため、この星に住む人型生命体の寿命は、平均500年という、驚異的な寿命を誇っている。

今から話す物語は、人間界を束ねる、「大弾正忠帝国」と呼ばれる巨大な国に存在する、

海軍の話である。

目次

秀吉編	1	
秀吉編	2話 出会い	
海軍士官学校	入隊式	
63	28	1

秀吉編

この物語は、太陽系から遙かに離れた星での物語である。

この星の生物には、体内に心力（じんりよく）と呼ばれる生命エネルギーが流れており、これは、傷の治癒や病気の回復を増進させ、また、生命力を大幅に上げるものでもある。

そのため、この星に住む人型生命体の寿命は、平均500年という、驚異的な寿命を誇っている。

今から話す物語は、人間界を束ねる、「大弾正忠帝国」と呼ばれる巨大な国に存在する、海軍の話である。

上り始めた朝日が、暗かった廊下を照らし出し、鳥達が心地よい前奏を奏で始めた頃、海軍士官学校のベッドで眠りについていた青年の目蓋は、ゆっくりと開き始め、厳しい訓練の始まりが、彼から眠気をさらい、奮い立たせる。

それから少しして。

「総員起床15分前」

朝の静寂に包まれた、ここ、大弾正忠帝国海軍士官学校。

その館内に、事前起床放送が流れ、訓練生達に目覚めの時間が迫っている事を告げた。帝国海軍兵の起床は、ラツパによる総員起床が有名である。

兵学校時代から教え込まれ、この起床ラツパ前に起きるとフライングとなり、教官から鉄拳が飛んでくる。

「今日の目標、カッター（短艇）訓練で殴られないことにしよう。」

青年がそう思った刹那、

学校内に、起床ラツパが響き渡った。

ラツパと同時に、ベッドで就寝していた全ての訓練生達が、飛び跳ねるかのようになり上がり、各自、ベッドに掛けていた訓練服に袖を通す。

海軍士官学校の訓練は、全て、艦内勤務を想定して実施されている。

軍艦内は、艦種にもよるが、海兵一人に与えられるスペースは決まっていて、その限られた空間を有効活用しなければ、海兵として務まらない。

士官学校で、最も学ばなければならない教育と言えよう。

そのため、戦闘服や水筒など、全ての物品、装備品の配置位置を、訓練初日から叩き込まれる。

これは、迅速に戦闘準備を行うためでもあるが、あらゆる不足の事態を想定し、即座に対応するためのものでもある。

例えば、艦が敵の攻撃などを受け、停電状態となっても、平時と変わらぬ行動を可能にするための措置も含まれている。

よって、その訓練は、過酷の度を極める。

「起床!! 起床!! 起床!!」

訓練生たちの寝室へ、教官がドアを勢いよく開けて入って来、声を荒げる。

教官のそれは、寝起きの訓練生達には、いい目覚ましとなる。

中には、ラッパよりも、教官の声で目覚める訓練生も居るぐらいだ。

海軍では、寝間着から訓練服への着装時間も決まっており、2分厳守。

そのため、起床ラッパ前にあらかじめ15分前と促すのは、眠気を醒まし、速やかな

着装を促すための配慮でもある。

この二分敵守を少しでも過ぎると、教官から鉄拳を頂戴するため、彼らは必死だ。

起床時間前に起きればいいと思われるだろうが、これも、立派な総員起床訓練である。

「秀吉の野郎は大丈夫か？ アイツ着替えだけは遅いから、いつも俺たちの班が鬼柴田（教官）に殴られるんだよな。」

「海軍の連帯責任には正直、まいるね。」

前者は前田利家、後者は丹羽長秀。

海軍に配属される前の2人は、帝国軍本部、作戦司令長官の参謀を勤めており、階級は中佐。

参謀として、各持ち場の指揮を執っていた二人。

前田利家は、少し乱暴な一面もあるが、部下の面倒身がよく、後腐れのない性格の彼は、部下達からよく慕われていた。

槍術が得意で、その腕前は、全国大会で優勝するほどだ。

その実力から、槍又左の異名をもつ。

一方の丹羽長秀は、非常にマイペースな性格ではあるが、与えられた仕事はなんでも、そつなくこなし、また、自分の主張するべきことは、物怖じすることなく主張する。

そんな立ち振る舞いの丹羽は、

上官達からよく、米五郎左（米のように地味だが、無くてはならない存在）とも呼ばれていた。

そんな2人の能力と人柄は、艦隊勤務において必要と判断され、帝国軍作戦司令長官が海軍へ推薦。

2人は見事、難関試験に合格、現在に至る。

海軍は、全て、帝国軍兵士の中から選りすぐられた、男女問わずの優秀な兵達で組織されている。

また、帝国軍人時代の階級は関係ないが、求められる能力を鑑みたら、自然と高級将校が多くなる。

弾正忠帝国の軍隊は、織田軍（官吏）、帝国軍（高級官吏）と、大きく2つに組み分け

されていて、織田軍は主に、警察的な組織であり、国民の警護、犯罪の取り締まり、災害発生時の救助活動などが多くの役目。

帝国軍は、簡単に言えば、精鋭部隊だ。

他国との開戦時に、最前線で戦い、国を守る役目を果たす者達であり、その重責は計りしれない。

織田軍の兵士達は、所属部隊の最高司令官の推薦を受けた者のみが、帝国軍選抜試験の受験資格を得られ、見事合格すれば、高級官吏（現在でいう国家公務員）として活躍できる。

その待遇（特に給与など）は、織田軍とは比較にならないものであり、全ての織田軍兵の憧れだ。

そのため、帝国軍人になるためならば、努力を惜しまぬ兵士がほとんどだ。

「おい！ 秀吉!! 早く着替えろよ!! また教官に殴られるじゃねえか！」

前田と丹羽は、一分と掛からずに、着装を終えていた。

それに対し、秀吉はまだ靴下を履いている段階だった。

残り時間的に鉄拳制裁である。

「も、申し訳ねえ、前田と丹羽のだんなあ。ほんとにすまねえ。」

もはや、毎朝の恒例になりつつある、秀吉の班のモーニング鉄拳。

本日も、鬼教官と名高い柴田勝家によって、鉄拳制裁が執り行われた。

「おい!! 貴様あ!! いい加減にせんかあ!! なぜ着装もまとものできんだあ!! お

い!! 前田ああ!!!」

「はい! 第一班!! 整列!!!」

鬼柴田は、前田を呼びつけた。

その前田は、教官の一声で鉄拳制裁を察知、自分の班員をベッド前に整列させる。

整列した秀吉は、既に着装を終えてはいたが、規則の二分以内を十秒程過ぎてしまっていた。

鬼柴田の拳が、秀吉達の顔面を捉える。

「これで七回目だぞ？ 貴様らがここに配属になってから皆勤賞ではないか。これで最後にしろ、いいな？」

鬼柴田の、凄みのある圧力は、5人を気圧し恐怖させる。

彼らは、七度目の覚悟を決めた。

教官達は規則ゆえ、粗相をした訓練生達を殴っているが、本当は誰一人、殴りたくないのだ。

しかし、一つの軍艦で、全員が生死を共にする海軍。

1人のミスが、全員の死に直結する事になる。

それを防ぐためには、こうした鉄拳制裁で、身体に染み込ませるしかないのだ。

「第一班!! 歯をくいしばれえ!!」

鬼柴田が、整列した班員達を順番に殴り飛ばして行った。

「(うう、痛ええ!! 畜生があ!! 次こそは二分を切つてやるうう!!)」

秀吉は自分に言い聞かせた。

自分のミスで、何の落ち度もない仲間達が殴られてしまうのだから、当然である。鉄拳制裁が下される時は、決まって、連携が必要とされる訓練でのミスだ。

罰直を受けた者は、次第にその事に気付き、二度と、同じ失敗をしなくなる。

こうした鉄拳制裁を通し、海軍兵達には、「ナニクソ魂」が、自然と培われていく。それが、艦を動かす上で最も重要な、各配置間の連携に、大きく繋がって行く。

「あの班はダントツで優秀なのに、もったいないよなあ。」

「ああ、まったくだな。」

他の班員も、前田達エリート班の鉄拳制裁を不思議そうに眺めていた。

秀吉達が海軍士官学校へ配属され、本日で一週間。

ついこの間まで、帝国軍の指揮官だった彼らは、多くの部下を抱え、部下に対しあらゆる指導を行って来た。

無論、教育という名の、「鉄拳教育」も実施してきた。

しかし、今の彼等は、クリクリ坊主頭の海軍訓練生。

彼等は、指導する側からされる側へと変わっていった。

海軍士官になるには、当然、士官学校の教育を経なければならぬ。

その士官学校配属試験は、前田や丹羽のように、帝国軍本部所属の少佐クラス以上でなければ、選抜試験をパスするのは、非常に困難だ。

無論、帝軍時代の階級や年齢は、合格に一切の影響を与えない。

海軍選抜試験は、実力が全ての、公平な試験が執り行われる。

モーニング鉄拳を頂戴した、前田利家を班長とする5人は、朝食をとるため食堂へ向かっていった。

その道中で

「痛ててえ 秀吉、おめえはなんで着替えが遅えんだ？ 毎朝こう殴られちゃあ、たまん

ねえぞ。」

前田は頬を押さえながら悪態をつく。

「なにか、事情でもあるのかい？」

同じく、頬を押さえながら丹羽が続いた。

「へ、へい！ すみやせん、前田のだんなあ 丹羽のだんなあ。おいらはどうも、着替えが苦手なんでさあ。」

秀吉は、鉄拳制裁に加え、

「鬼柴田怒りのゲンコツ」

も頂戴していた。

「そんなことはもうわかってんだよ！

そのために何か対策を考えなきゃならんだろうが！

お前は着替えの何が苦手なんだ？」

前田は、秀吉の着装の遅さに呆れつつも、二分厳守の壁を克服させようと試みていた。そうこうしているうちに、長い廊下を抜けた秀吉達は、建物の中央棟にある大食堂に到着。

食事は既に配膳されており、あとは、教官長の挨拶を待つのみ。

帝国海軍の食事は、贅沢を極めている。

朝は納豆に、生卵か目玉焼き、

汁物に香の物と、好みで肉皿か、焼き魚がでる。

朝は簡素なものだが、

昼は洋食のフルコース。

夜はお膳付きと、かなり豪華なものだ。

食材は、帝国の各産地から厳選された、最高級品を使用。

調理には、実際の軍艦内においても、兵士が調理をする事はなく、各艦に専属のコックがいる。

この贅沢な食事も、帝国海軍の魅力の一つだ。

訓練中などのミスで、罰直が与えられる事があるが、それは鉄拳教育や課題の追加、校庭を走らされたりすることなどに限られ、食事抜きなどに関する罰直は、ストレスの溜まりやすい艦内勤務での士気を保つ上でも、士官学校教育期間中でも、禁止とされている。

食事に関する罰直があるとすれば、食事を残すことだ。

海の上で闘う海軍では、食料は生命線そのもの。

その、大変貴重な食料を残すことなど、言語道断。

そのため、食事を残した者には、個別で、一際キツイ鉄拳制裁が待っている。

「教官長!! 入室!!」

1人の教官の号令で、朝の挨拶で賑やかだった食堂は静まり返った。訓練生達は、背筋を伸ばして座り、教官長の言葉を待つ。

「皆、おはよう。よく眠れたかな？ 今日もしも良き訓練が出来るように精を付けてくれ。いただきます。」

教官長のシンプルな挨拶がおわり、号令をかけた。

いただきます!!!!

食堂全体に訓練生達の声が響いた。

これから一時間、食事や談笑を楽しむ。

「海軍に配属になって本当によかったぜ!。」

こんなに美味しい飯が朝から食えるんだからよお!!」

前田達は、5人掛けテーブル中央にある炊飯器から、炊き立ての米を山盛りにして、胃袋を満たしていく。

米は、各班毎に番号の振られた炊飯器があり、それがその班の米だ。なかなかの量があり、残すのは許されないが、それは心配に及ぶ事ではない。

「うむ。しかし、本当に美味しい。」

米が一粒一粒立っている上に、濃厚な米の香りが口の中に広がっていく。

それを、脂の乗った焼き魚をおかずに食す。こんな贅沢な食事が訓練生のうちから出るとは、さすが、弾正忠家（帝国を統べる王族）が、総力を上げて設立した、海軍だ。」

帝軍時代、中佐だった前田と丹羽は、高級将校の肩書きに恥じない、贅沢な食事をしてきた。

しかし、その2人でもこの驚き様。

海軍の食事が、いかに贅沢かが窺える。

軍人にとっての楽しみは、休日を除いては、大抵食べる事、寝ることである。

海軍は、贅沢な食事に加え、艦内生活においても格別に条件がよい。

帝国海軍全ての軍艦は、冷暖房完備、乗組員全員にベッド支給という待遇だ。

陸上で、泥の上にテントを敷いて寝る帝軍と、空調設備の整った快適な部屋に、フカ

フカのベッドで生活をする海軍の生活環境とでは、その差は雲泥の差だ。

この待遇の良さが、閉鎖的な艦隊勤務に従事する兵士達の士気を上げ、また、帝軍の海軍配属希望者を出すのに、一役かかっている。

海軍訓練学校での食事時間は、キツカリ一時間。

帝軍や、織田軍での訓練学校は、20分と、かなり短い。

これは、陸上戦闘において、突然の奇襲を想定した上の、短かさだ。

「うおおー！ こりゃあ美味いですぜえ！ 今日の焼き魚も脂の乗りが最高だあ!!」

秀吉は、頬と頭部の腫れや痛みを忘れ、炊きたての米と、焼き魚をかき込む。

その表情は実に、幸福そうだ。

海軍は、食事の時間を大切にしており、この一時間を必ず、食堂で過ごさなければならぬ。

無論、その時間は談笑を許され、各々コミュニケーションを取る事が可能だ。

朝食は、訓練生全員が同じ時間にとるため、

この時間を使い、気になる異性の訓練生に近づくのも、課題や、実技の相談をするのもありだ。

「ねね殿は、どこにいやすかのお。」

秀吉は、朝食を即座に食べ終え、女性グループの席へ向かっていった。目的は、気になる女だ。

「あら？ 秀吉さんよ!! ねえ! こっちに来てくださいよ!!」

秀吉を見かけた女性訓練生達が声を掛けてきた。

上記でも書いたが、秀吉達のグループである前田班は、成績優秀・運動抜群・容姿端麗と、女性の人気をかつさらうには、充分なカリスマ性を持っており、海軍配属一週間足らずで、この人気ぶりだ。

丹羽や前田は、190歳を超える立派な大人だが、秀吉はまだ130歳と、成人（この星の人間の成人は120歳）を迎えたばかりだ。

その若さと実力から、秀吉は同期女性のみならず、先輩の女性達からも、人気があった。

「ああ、おはようでさあ！ 今日も訓練を頑張りやしようでさあ！」

秀吉は、集まって来た女性達に挨拶を交わし、目当ての人を探す。

すると、

「あー、ねね殿!! おはようでさあ！ 今日も元気そうでありやすなあ!!」

秀吉は目当ての訓練生を見つけると、一目散に駆けていった。

「あー！ 秀吉さん!! おはようございます。今日のカッター訓練は負けませんかよ？」

ニツコリと秀吉に微笑んだ彼女の名は、

木下ねね。

今回の、海軍配属訓練生の中で最も若く、120歳を迎えたばかりの新成人だ。

男子最年少の秀吉より、さらに10歳若い。

彼女は、織田信長に選ばれた、「元帥の弟子達」の1人だ。無論、秀吉もそうである。

織田信長が海軍を設立させたのは、20年の天界留学から戻った直後の、今から100年前。

当時の信長は、35歳（中等学生）だった。

「元帥の弟子達」は、正式名称を、「特別年少兵」とされている。

この者達は、信長が、学生の頃に出会ってきた優秀な人材の事を指す。

彼の、「鶴の一声」で選ばれた特別年少兵達は、今回の士官学校配属者300人の中で10人程いる。

当然、「元帥の弟子達」の試験は平等に行われる。

不合格ならば、それで終わりだ。

ここで、秀吉と、帝国海軍創設の過去話にお付き合い願いたい。

秀吉は、帝国海軍創設者である、織田信長直々の推薦で、海軍士官学校へ配属が決まった「元帥の弟子」だ。

帝国の、片田舎の大学に通っていた秀吉。

在学中、授業の為に出向いた海軍省、海軍士官学校を見学。

この見学が、彼の人生を劇的に変えたのだった。

戦艦の甲板上で、真っ白な第二種軍装に身を包んだ海軍将校達が、横一列に並び、直立不動の姿勢で秀吉達を出迎えた。

これは登舷礼と呼ばれ、戦地に赴く海軍の戦士達が、故郷に別れを告げるためのものであり、また、これは、客人や司令官を艦に迎える時や、弾正忠様（帝国の王）に出撃の覚悟をお伝えするものでもある。

登舷礼は、まさに、最大の敬意を払う儀式そのものだ。

その、壮観な光景を目の当たりにした若き日の秀吉は、その日を境に、海兵になるとで頭がいっぱいになっていた。

帝国国民として、何不自由なく過ごしてきた秀吉。

これといった目標や夢も無く、ただ自墮落に生きてきた少年の目に、海軍将校達はあまりに輝いて見えたのだ。

目標と夢が同時にできた秀吉は、それまでやる気を出してこなかった勉学に励み、また、多くの情報を仕入れ、学食での食事から、海軍ご用達の食堂をつきとめ、そこで昼食をとるようになった。

秀吉は、集めた情報を駆使し、訓練生達に接触。

持ち前の明るさと人懐っこい性格は、海軍訓練生達との打ち解けを難しくするもので

はなかつた。

「お！ ひでちゃんか！ こつち来いよお!!」

休日中の訓練生達が集う、馴染みの食堂に秀吉は現れ、呼び掛けられた。

「へい！ 兄貴い!! ここの飯が美味くて今日もきてしまいましたぜ!。」

秀吉は、訓練生達によく可愛いがられ、瞬く間に仲を深めていった。

訓練生の休日には、共に、旅行や呑み会に参加するほどまでだ。

秀吉は、こうした機会を通じ、訓練生達から、訓練カリキュラム、生活環境などを聞き出し、全て、ノートにまとめていた。

そんな穏やかな日常の中、秀吉にある一人の男との出会いが訪れる。

「そういえば明日は、元帥様が俺達の士官学校に視察に訪れる予定だったな?。」

ある訓練生が話題を出してきた。

「ああ、明日の午前10時に、視察に参られる予定だ。」

「それにしても、本当若い元帥様だよなあ。まだ90代だろ？ さすが、弾正忠家の跡取りだ。」

「海軍の創設から何から何まで、全部元帥様が手掛けたしなあ。俺らより100才以上若いのに、大したもんだよ、本当に。」

秀吉は、訓練生のこの話題が気になり、2人のとこに駆けつけた。

「兄貴い！ 今の話していた人は誰ですかい？ 元帥様と聞こえやしたが、信長様のことですかい？。」

「お！ さすが秀吉だな。」

「その通り！ 我らが海軍の生みの親だ。」

まあ、お前なら海軍創設話なんてのは朝飯前だろ？」

訓練生が笑みを浮かべながら、秀吉に問いかける。

「もちろんでさあ！ 信長様は、海軍設立前から、帝国で最も大きな造船工廠、九鬼造船の工廠長、九鬼嘉隆（くきよし）か）工廠長へ戦艦建造を命令。

必要な資材や、労働力を全面的に支援し、数多くの軍艦が建造されやした。

帝国海軍設立後、九鬼造船工廠は、九鬼海軍工廠と名を改め、その規模をさらに拡大、今や世界一の海軍工廠でさあ！」

設立からまだ歴史の浅い、大弾正忠帝国海軍では、元帥は創設者の信長を意味する。

秀吉が、海軍士官学校配属になる、120年前の、弾正歴2750年。

帝国を代表する、3人の若者が、先の大戦で戦いを繰り広げた天界へ、和平締結の意味合いもこめ、留学へ旅立った。

彼等3人は、天界で初めて戦争を経験し、帝国が、いかに平和ボケしているのかを知った。

なかでも衝撃だったのは、海上で戦う、天界海軍の存在だった。

天界では、未だに国土をめぐる戦争が頻発していた。

その天界で、指揮官としてあらゆる戦闘を経験していく中、留学生の3人は、海上戦闘を経験。

天界海軍は、巨大な帆船が幾つも存在し、その帆船へ、無数の大砲と戦士達が乗り込み、天界の領海を狙って攻めてくる海洋獣達と、幾度も戦闘を繰り広げていた。

巨大帆船で、敵の本拠地（巣窟）に乗り込み、大砲射撃を加え、一網打尽。

この斬新な戦闘方法に、最も影響を受けた一人が、留学10年目の、当時25才（地球人の感覚では小学生に値する年齢）だった帝王の息子、織田信長である。

信長は、20年（この星の人間にとっての20年は、我々地球人からすると2年の感覚）

の天界留学の中で、海軍の重要性を認識。

留学当時の帝国は、漁業船や、鉱油（エネルギー鉱石から採油できる燃料）を輸出するための、巨大なタンカーなどは何百隻とあったが、大砲などを積んだ船は、戦争の無い平和な時代も相まってか、広大な帝国の領土を守るには、あまりにも不十分な数しかなかった。しかも、それらを纏める組織もなかった。

信長は、天界の海上戦闘を経て、敵がいつ攻めてくるかもわからぬ緊張状態の恐怖を体験し、

帝国においても、同様の事態が起こることを危惧した信長は、海軍創設を強く決意し

た。

荒れ狂う海上で戦う海軍無くして、国民の永遠の平和は築けないと、この時気付かされたのだ。

人間界にも、いつ、戦争が起きるかわからない。

事実、非同盟国の中には、帝国の肥沃な土地、資源豊富な領土を狙っていることは、なにも珍しい事ではない。

他国が、弾正忠帝国に戦争を仕掛けない理由として、帝国軍の存在がある。

その絶対的な軍事力が、強力な抑止力となっているのは、間違いないだろう。

陸上戦闘において、古くから世界最強の名を欲しいままにしてきた大弾正忠帝国軍。

しかし、海軍力がほぼ無に等しいこの帝国。

天界海軍が発揮した恐るべき艦砲射撃は、堅牢な甲殻を誇る海洋獣達を容易く粉微塵にしてしまった。

信長の脳裏に過つたのは、

他国が海軍力を充実させ、帝国に対し攻撃を仕掛けて来た場合、陸上でしか戦闘ができない帝国軍は、一方的に艦砲射撃をうけるだろう。

そうなれば、この海洋獣達の無惨な姿が、帝国軍兵士の姿となり、その惨状は、火を

見るより明らか。

天界留学から戻った信長は、直ちに海軍構想案を、父、織田信秀へ申し出た。

天界での経験語る息子の言葉はあまりに重く、信秀は即座に、重臣及び、親官（弾正忠家の親族）を召集させ、最高権力会議をひらいた。

各地方を治めている代表たちを前に、信長は微塵も臆する事なく、海軍設立の重要性を説いた。

元々、帝国の造船技術はかなりのもので、船体の設計にはさほど苦勞はしなかった。

今まで戦艦を建造してこなかったのは、帝国軍の存在による慢心と、数百年前の天界戦争がありはしたが、戦ったのは帝国軍陸上部隊。

今やその戦争も終結し、天界とはかけがえない同盟国となった。

こうして、再び平和な時代が百年以上続いたため、戦争への懸念や、危機感が欠如していたことは、否めない。

最高権力会議を終え、無事、

弾正歴2770年 「大弾正忠帝国海軍」が設立。

こうして信長は、創設者として、ゼロから海軍を創り出す。

設立当時の信長は、まだ35歳。

まだまだ未成年の学生であつたため、成人するまでの間は、普通の学生生活を送りながら、学校帰りに海軍へ赴き、天界で得た経験を基に、海軍の訓練方法などを研究、実践する日々を続け、現在の帝国海軍の礎を築いてきた。

戦艦に関しては、海軍設立前から、研究、建造に取り掛かせていたので、それに関しては滞りはなかつた。

天界海軍は、木製の巨大な帆船であつたが、信長は、鉄でできた自動推進巨大タンカーや、貨物船を建造可能な造船技術を見込み、海軍設立前から、当時、最も高度な造船技術を誇つていた九鬼造船工廠へ戦艦の建造を命じた。

その結果、堅牢な鋼鉄に覆われ、巨大な大砲を備えた、頑強な戦艦の開発に成功。

天界海軍の大砲とは遥かに違い、帝国海軍の軍艦の主砲は、周囲を鋼鉄で守り固められ、艦体と主砲塔は、自ら放つた主砲弾にも耐えられるよう、頑強に設計された。

その後、あらゆる実験や研究を行い、その艦体と、主砲の口径、艦数を増やしていった。

以上が、帝国海軍創設の由来である。

士官学校編2 に続きます

秀吉編 2話 出会い

訓練生達の話の中で、明日、海軍創設者の織田信長が、秀吉の地元にある、蜂須賀海軍士官学校へ視察に訪れると知った秀吉は、即、その視察の見学を教官達に願ったが

「だめだだめだ。訓練生でもないただの大学生のお前が士官学校に入れるわけがないだろ！海軍を崇拜するお前の気持ちはわかるがなあ」

海軍士官学校は、一般人の立ち入りを厳しく制限している。

学校内には、機密保持厳守の資料や、暗号表などが無数に存在しているためだ。

弾正忠家は、それらを護るため、士官学校周辺は高い塀と鉄柵で囲ませ、厳重な警備体制を施させた。

通常の警備であれば、織田軍の兵が警備に付くが、帝国全土にある海軍士官学校の警備は、帝国陸軍兵が24時間警備に当たっている。

その警備体制はまさに、「鼠一匹たりとも通さぬ」が如くだ。

「そ、そうなんでやすか。」

秀吉の落胆は凄まじいものであった。

しかし、ある訓練生の言葉が、彼の人生をさらに変える事になる。

「秀吉！、いいことを教えてやるよ。」

信長様は今大学生だ。

年もお前と近いんだぞ？ たしか、95歳だ」

この星の人間は、その寿命の長さから、我々地球人の教育とはかけ離れた教育体制をしている。

学校教育が始まるのは、年齢が10歳からだ。

小学生が受ける教育期間は、20年。

中学、高校、大学の教育期間は、一貫して30年間の教育をうける。

つまり、

(小学生) 20年 (中学) 30年 (高校) 30年 (大学) 30年

大学院まで進み卒業するとなると、学校教育期間は、じつに120年間にも及ぶ。

当時の秀吉は、高校を卒業し大学へ入学したばかりの90歳。

一方の信長は95歳。

秀吉は運命を感じずにはいられなかっただろう。

「ということは、信長様はあと25年は学生でおられるんですね!! こうしちやいられんでさあ!!」

「おー！ 何か活動でもするのか？」

「兄貴い！ 男にやあやらねばならない事があるんでさあ!!」

秀吉は木下食堂名物の、特製カツ丼を急いで食べ始めた。

訓練生達は、やれやれ という表情を浮かべながら、秀吉の今後の行動を予想し、応援することを決めた。

その和やかな雰囲気の中、訓練生お気に入りの木下食堂に、ある人物が訪れる。

「お、ここであるな？ 蜂須賀海軍士官学校生お気に入りの食堂とは。」

「そうらしいな。おれたちも食ってくか？」

「ちょうど昼食の時刻だ。」

「うむ。舌の肥えた海軍訓練生達が入っているのであれば、間違いないであろうしな。」

海に面した、木々の生い茂る美しい通りにある、この木下食堂。

士官学校から歩いて5分の距離で、休日には訓練生達で大賑わいだ。

店内は、壁にある無人島の風景画が目を引き、とても落ち着いた雰囲気、カウンター8席に、四人掛けテーブルが7席に、海を眺められる窓際のお座敷には、10人程が座れる。

本日も、昼時の時間帯もあってか、店内には訓練生達だけでなく、家族連れやカップルで賑わっていた。

飾らず、素朴な味わいが人気の店で、地元ではお袋の味として有名だ。

海軍訓練生達の訓練一年目は、休日であっても、地元への帰省が許されない。

そんな環境のためか、帝国軍出身の屈強な訓練生達であっても、帝国軍以上に厳しい

海軍の訓練の中で、表面上ではわかりにくい隠れホームシック状態になる訓練生は少ない。

そんな訓練生達を癒やしてくれるのが、士官学校勤務の一流の精神科医の治療ではなく、この木下食堂だ。

夫婦二人三脚で切り盛りしており、その穏やかな雰囲気と、心優しい人情味溢れる2人を前に、訓練生達は自然と愚痴をこぼす。

夫婦には、高校生になる娘もいる。

この娘も、学校が休みの日は店を手伝っている。

この娘がこれまた美しく、この娘を目当てにくる一般客も多い。

まさに、看板娘だ。

「あら？ 秀吉さん!! いらしてたんですね! 私、また新メニューを作ってみたくて! 味見をお願いしてもいいですか?」

秀吉を見つけた娘は、満面の笑みを浮かべ、秀吉に自分の創作した料理の味見を願った。

秀吉が美味すぎると評価したメニューは、忽ちメニューとして提供され、人気メ

ニューへと変貌を遂げる。

「あ、ねね殿！ すみませぬ。今日はこの後にやらねばならぬ事が出来てしまったんでさあ。また来週にきますんで、その時に食べさせて下さいでさあ。」

そう、彼女の名は木下ねね。

将来、秀吉と共に海軍訓練生となる、

「元帥の弟子」になるまえの彼女だ。

ねねは、あれ？ いつもと違うな？ という表情を浮かべながら。

「やらなきやならないこと？ 何ですかそれは？」

「はい！ オイラは弾正忠大学へ編入するでさあ!!。」

訓練生達は皆、ヤツパリなという表情を浮かべていた。

「え、だ、弾正忠大学!? あの帝国を代表する超名門大学にですか!?

帝国で唯一、お金の掛かる大学ですし、お金持ちばかりしかいない大学です! そんなところに行っても、次元の違う頭脳や考えを持った同級生達には秀吉さん絶対付いていけないでしょうし、なにより! 弾正忠大学への中途編入なんて聞いたことがありません!!」

ねねは、自分の意見は濁す事なく伝える女で、今回の機関銃トークがいい証拠になったであろう。

ねねの言う通り、秀吉の通っている地元（蜂須賀大学と、弾正忠大学（以後、弾大と名称）との偏差値はかなりの差があった。

毎年行われる弾大の入試には、帝国全土の名門校から、成績の優秀な学生達が怒涛の如く押し寄せて来る。

その受験生たちの平均的な偏差値は、驚異の97だ。

帝国に存在する全ての学校は、授業料が一切掛からない。

帝国建国当時は、弾大においても授業料はなかったが、弾大は弾正忠家が直接運営をしている大学であり、弾正忠大学出身というだけで、どこの公共機関でも、就職の際に書類審査の段階で採用される。

しかし、優秀な受験生達が弾大を受ける最もたる理由は、織田軍への入隊が優先されることにある。

弾大での教育カリキュラムは、高級官吏である帝国軍人に実施される内容を前提としている。

他国に、外政官として派遣されることもある、彼ら帝国軍人。

政務以外にも、他国での災害発生時（自国は織田軍が災害対応をする。）には、救助支援隊として派遣されることもある。

これらも、帝国軍人達の立派な仕事だ。

そのため、彼らには高度な語学力や、知識が必要とされる。

その任務をこなすため、織田軍入隊直後から、大弾正忠帝国軍人として恥ずかしくない教育が施される。

その教育は、礼儀作法からはじまり、各国の母国語のマスター、あらゆる格闘術、武

器の整備や射撃技術、馬術、社交ダンスなどと、どの国に派遣されても、帝国の顔として恥を搔くことのない教育が実施される。

ちなみに、今上げた科目は、全体からすればほんの一部にすぎない。

弾大では、こうした教育が受けられるので、織田軍への優先的な入隊や、昇進、帝国軍への推薦などを非常に受けやすい。

もし、織田軍への入隊がかなわなくても、弾大の卒業生には優れた語学力や知識が備わっている。

それを生かして、国会の事務職や書記、各大臣の秘書、各国の帝国大使館の職員など、国務関連の仕事に従事する職員の殆どは、弾大出身である。

そんな大学が人気でないはずもなく、毎年の受験者数は、定員数を遥かに超える。

その、あまりの人気から、対策として高額の授業料を取ることにしたのだ。

しかし、授業料発生という対策を実施したにも関わらず、若干の受験者数減少にとどまり、大した成果はなかった。

経営陣である弾正忠家は、大学の規模を拡大せざるをえなくなり、現在の弾大の数は、

帝国全土に6校建てられ、受験者の拡散をはかった。

無論、この6校の授業料、教育カリキュラムは同等である。

「弾大はエリート中のエリート、この帝国を将来支える人達を養成する大学です!!
そんな超名門大学に行つてなにをなされるのですか!?!」

秀吉は地方にある弾大ではなく、帝都「尾張」の弾大へ進むと言っているのだ。

帝都「尾張」は、秀吉やねね達の地元である蜂須賀から、かなり遠方にある。

秀吉は、ねねの、顔を真っ赤にしてまで反対する様に驚きを隠せないでいた。

なぜ、ここまで反対されるのか?。

今の秀吉の頭には、海軍への入隊の事しか無く、ねねの、異常なまでの反対に、戸惑いと憤りを感じつつあった。

そこへ

「娘、未来ある若者の夢を邪魔するのは、関心せぬな。」

その言葉を発したのは、青色の弾正忠大学特有の色合いをした制服に身を包み、頭には、金色の織田木瓜紋が輝く大学制帽を被った、海軍元帥織田信長が、晴れ渡った空から降り注ぐ光を背に、その、凛々しき姿を店の前に現していた。

「!? げ、元帥閣下!？」

海軍訓練生達は、突如目の前に現れた信長に驚愕。

全員、すつ転ぶ勢いで立ち上がると、肘を折り曲げた海軍式の敬礼を送った。

信長はこれに返礼し、訓練生達を座らせた。

「すまぬの。視察は明日の予定であったが、余は今日から大学が休みでな。

それを利用し、蜂須賀鎮守府や、士官学校近辺を観て周っておったのだ。

その折り、たまたまこの食堂をみつけてな。

こここの噂を兼ねてから聞いていて、とても興味があったのだ。

だから、昼食を兼ねて訪ねてみることにしたのだ。」

信長は言い終えると、「よろしいかな？」と言い、ピカピカの革靴をコツコツと鳴らしながら店内に入ってきた。

店のご主人は、慌てた様子で席へ案内し、昼食に訪れていた家族連れやカップル達は、驚きのあまり、皆一様に口を開け箸が止まってしまっていた。

信長は、美しい海が一望できるお座敷へ通され、靴を脱ぎ、用意された座布団に正座する。

信長は背筋をピンと伸ばして正座をしており、その、気品に満ち溢れる姿は、忽ち周りの人々の視線を集め、魅了する。

ねねは、慌ててお茶を用意し、信長へ運んでいった。

信長は「すまぬな。」と礼を述べ、お茶を一口飲む。

「して、娘。先程その学生が我が大学に編入するのを反対していたが、それは何故な

のだ？」

ねねは、目の前に現れた王族の信長を前に、完全に上がってしまった。

写真や、テレビでしか見た事のない織田信長を前にしては、さすがのねねも、何時もの強気な言葉が出て来ないようだ。

秀吉はというと、同じく目の前に現れた憧れの信長を前にして、こちらは驚きのあまり、よだれをたらしてしまうほど口が開き、放心状態となってしまうていた。

「あ、あのお、確かに、は、はは反対ではありませんすすす!!!」

ねねは動揺を抑えられず、言葉を嘔みまくってしまう。

しかし、回らない嗜好のなか、必死で秀吉への思いだけは伝えようと努力するが。

「うむ、して、その理由はなんなのだ？」

信長は、心底不思議そうな顔で尋ねていた。

「ですから、そのお」

ねねは顔を赤くし、段々小さくなっていった。

信長は、秀吉を横目にするねねを見、何かを察したのか、

「まあ、よいか。その男の前では言えぬ事のようにあるようだしな。」

信長はねねに微笑み掛け、「娘、名はなんと申す？」と訪ねた。

信長の不意の微笑みに動揺が収まったのか、ねねは。

「え？ あ！ はい!! 私は、木下ねね ともうします！」

と、いつもの微笑みを浮かべながら名乗った。

「木下ねねか、気に入ったぞ。」

お主の煎れたこの茶、じつに見事だ。

ひさしぶりに美味しい茶を飲んだ。

「ご主人、素晴らしい娘であるな。」

「ははー！！ 恐れ多いことでございます。殿下。」

ねねの父親であるご主人は、心ここにあらずという表現が相応しい緊張ぶりで、その様子が言葉使いからも窺える。

普段は物腰の柔らかい和やかな口調である。

「ご主人、オススメを2食頼めるかな？」

「はは！ 承りました！！ 直ぐ、お作りいたしますので、お待ち下され。」

「うむ、よろしく頼む。」

注文を受けたご主人は、即座に厨房へ駆けていき、腕を振るう。

一方、しばらく放心状態だった秀吉は、
やつと意識を取り戻した。

「はっ!! こころ! こころは、の、の信長様!! ほほ、本日は才、お日柄もよろしく!!」

秀吉も、ねね同様に言葉を噛みまくる。

しかし、こちらはかなりの重傷だ。

訓練生や他の家族連れ達は、秀吉のあまりの動揺ぶりを見て緊張がほぐれたのか、張りつめていた空気は霧散し、少しの余裕と笑顔がチラつき始めていた。

「おい、お主。何を言っているのかわからぬぞ。」

「ひ、ひひひひ、ひ秀吉でさあ!! オイラの名前は秀吉というんでさあ!!」

当の信長も、秀吉の様子を見て笑っていた。

秀吉は、緊張しながらも、信長に名前だけでも覚えてもらおうと思ったのか、仕切りに名前を連呼しだした。

しかし、気持ちの整理が出来ていないためか、しつかりと嘯む。

「うむ、そうかそうか。お主は秀吉というのだな。

面白き男よのう。」

信長は、口角が上がる程の笑顔をみせていた。

信長も、秀吉の人柄や雰囲気にもまされてるようだ。

「秀吉とやら、聞けば弾正忠大学に編入したいそうであるな? お主は何を求め、我が大

学への編入を望むのだ？」

信長からの質問を受けた秀吉は、憧れの信長と会話が出来ただけでも満足であったが、目の前にいるのは、自分が志すと決めた帝国海軍の創設者。

不意に冷静さを取り戻した秀吉は、自分の中に、野心にも似た、強く、どす黒い欲が芽生え始めている事に気付きはじめた。

「信長様！ それは決まっていますさあ。 オイラは、帝国海軍に入りたいのですさあ!! 海軍への校外学習で、オイラは登舷礼をみたのですさあ。」

その瞬間から、オイラの世界は海軍の事でいっぱいになってしまっただうしようもないのですさあ!!。

信長様！ この秀吉、何でもしますからどうか！ オイラを弾正忠大学へ入れてほしいですさあ!!。」

秀吉は躊躇することなく、信長へ直接弾大へ編入させてくれるよう、嘆願した。

その凄まじい気迫と熱意は、常軌を遙かに逸したもので、そばにいたねねや、訓練生達を驚かせた。

その場にいた誰もが、秀吉が抱く海軍兵になることへの熱望を、本当の意味で知ることとなった。

「うむ、その熱意と気迫、疑いようのないモノであるな。

秀吉、お主今、何でもすると申したな？」

信長は、もう一度、秀吉の覚悟を確かめるかのように聞いた。

秀吉は、間髪を入れずに。

「もちろんでさあ!!!!」

信長は張り裂けんばかりに声を荒げた秀吉の中に、巨大な大木のように太い芯と、決

して折れることのない決意を確かめた。

「うむ、気に入った。恒興、新たな弟子を見つけたぞ。名は秀吉だ。」

信長は、意を決したように、学生制服の胸ポケットからメモ帳サイズのリストを取り出すと、その名簿欄に秀吉の名前を書き足した。

そして信長は、誰かの名前を呼び出した。

その当人は、乗ってきた車を駐車場に止めてやって来、信長の呼び掛け声とほぼ同時に店内入ってきた。

海軍訓練生達は、先程同様、一斉に立ち上がり、恒興へ敬礼を送った。

店内に入って来た彼は、信長と同様の弾正忠大学の制服に身を包んでおり、名を池田恒興。

信長と共に、帝国の代表として天界留学へ旅立った3人の内の1人だ。

恒興は、海軍創設者の信長を補佐する立場にある。

「ふう、やっと駐車場に停められたぞ。

さすがの人気食堂だな。

で？ そいつが新しい弟子か。

確かに、凄まじい覚悟を感じるな。

秀吉って言ったか？ 俺は池田恒興だ。

よろしくな。」

「これは池田様!! お目に掛かれて光栄でさあ!!

この秀吉、今日は人生で最高に幸せな日でありますでさあ!!。」

「お？ 俺の事知ってるのかい。こりゃ嬉しいねえ。」

「とんでもないでさあ! この帝国で恒興様の事を知らぬほうがおかしいでさあ!」

店内は、またの超大物の登場に、混乱寸前であった。

池田恒興といえは、帝国陸軍鉄砲隊の鉄砲奉行を任されている、池田家の嫡男であるからだ。

弾正忠帝国陸軍が、世界最強を誇っているのは、この、鉄砲奉行である池田家の射撃技術があつてこそだ。

「そうなのか。俺も有名になつたもんだぜ。」

俺はてつきり信長と一緒に居ることが多いもんだから、女共の黄色い声援は信長へのものとばかり思つてたぜ。」

「いや、それに関しては、余への声援で正解ではないか？」

信長は悪戯な顔を浮かべながら言った。

「おい信長、少しは肯定してくれよお。」

はああ、色男と一緒にいると、辛えもんだぜえ。」

そんな2人の、仲むつまじい？ 会話をよそに、周りの人達は苦笑いをするしかなかった。

「ふ、すまんの恒興。

さて秀吉、この手帳が何だかわかるか？」

信長は、左手に持っている本草のシステム手帳を、秀吉に見せた。

その手帳を開けると、中に名簿がある。

手帳は本草で出来ており、正面には織田木瓜が描かれている。

「へい、皆目見当もつかねえでさあ？」

「で、あるか。これはな、余が責任を持って面倒を見ると決めた者達を記す名簿だ。

今、その名簿にお主の名前を書いたのだ。

今からお主は、この信長の弟子だ。」

未成年の学生の中には、現役の軍人以上に、優れた能力や実力を持った、ダイヤの原石とも言わべき人材が希に存在する。

信長は、そういった人材を、未来の海軍士官として確保するため、織田軍訓練学校の視察や、他大学の見学などを、大学の休みを活用しながら頻繁に行っている。

こうして選ばれた者達は、

後に、「元帥の弟子達」と呼ばれるようになり、この者達の中から、「弾正忠五大将」が生まれる事になるが、それはまだまだ先の話である。

「ほ、ホントでありやすか!? 信長様!! オイラを海軍に入れて下さるんでありやすね!? ウオオオオオ!! 身に余る光栄でさあ!!」

秀吉は、信長の弟子に加われた喜びを嘯み締め、大いに喜んだ。

しかし、信長から、ある忠告を受ける。

「うむ、お主の喜び、大いに結構だ。

しかし、お主がこれから歩むのは、険しい棘道。

しかも、並大抵のモノではない。

未来の海軍士官たる器を鍛えるため、余は鬼にならねばならぬ。

秀吉、お主の覚悟は充分、余に伝わっておる。

今更承諾は取らん。

心せよ、秀吉。」

「はいでさあ!!!!
粉骨碎身、オイラの命は信長様の物でさあ!!!!」

以上が、信長と秀吉との初めての出会いである。

信長に選ばれた弟子達は、帝都「尾張」の弾大へ、特待生として通学する事となり、一般入試で入学した学生達とは、比較にならぬ程の過酷な教育環境に置かれることになる。

秀吉の話が纏まったのを見計らったかのように、座敷に正座する信長と恒興の下に食

事が運ばれてきた。

メニューは、木下食堂人気No. 1の、若竜の唐揚げ定食だ。

「殿下！ 大変長らくお待ちせし、申し訳御座いませぬ。こちらが、当店人気の定食でございます。お口に合うかどうか。」

ご主人は、自慢の料理を作り上げ、提供した。

その心情は、さぞ不安にかられているだろう。

「すまぬの。」

うむ、これは美味そうであるな。

こんがりキツネ色に揚げられた唐揚げが、食欲をそそりよる。

では、頂こう。」

信長と恒興は、目の前に出された定食に舌鼓をうち、その美味さからあつという間に平らげてしまった。

「ふう、いや〜うまかったぜ、若竜はこういった調理法もあんだな？。ステーキにして食うもんだと思つてたぜ。」

若竜とは、天界との交易の中でもたらされた、食用の飛竜の事である。

上質な肉質と、スツキリとした脂が乗っており、その味は鶏とは比べものにならない。繁殖力もかなりのもので、容易に飼育出来ることから、天界からもたらされると、忽ち帝国全土へと普及していった。

「ご主人、見事な料理を馳走になった。」

我が海軍の訓練学校生が足繁く通うのも、納得の味わいであった。それでは、時間もある、勘定を頼む。」

信長は、分厚い財布を内ポケットから取り出すと、現金を取り出し、勘定札へ挟んだ。

秀吉は、信長達の食事が終わると同時に、今後についての話を持ちかけた。

「信長様！ オイラは、これから何をすればいいんですかあ？。」

なんなりと、お申し付けください！。」

「うむ、先ずは、余達に付いて参れ。」

「この後は暇であるか？ 秀吉。」

「はいでさあ!! 御命令とあらば、例え火の中であろうと付いて行くでさあ!!」

「そうか。それは頼もしい限りだの。」

信長は、秀吉の浮かれぶりが可笑しく、店内で飛び跳ねて喜ぶ秀吉を見て笑顔を見せる。

信長達は、勘定を終え、店を出る支度を始めた。

そんな中、1人浮かない顔をしている娘がいた。

その娘は、ねねだ。

彼女は、両手を前で掴み、顔は俯かせていて、その様子は、暴走しそうな感情を必死で抑えているかのようだ。

「よし！ 信長、秀吉、そろそろ出ようか。

悪いが、車まで少し歩くが、勘弁してくれよ？」

「是非もなからう、店は混んでいたしな。

気にするでない。

「ご主人、うまかったぞ。また、来る。」

「親父っさん!! 今日もうまかったでさあ!!

またくるでさあ!!」

「どうもありがとうございます。またのお越しを心よりお待ちしております。」

「ご主人は、柔らかな笑顔を見せて、信長達を見送った。

その刹那。

「ま、待って下さいい!!!」

店の周囲に、ねねの、悲痛にも似た叫び声が響きわたり、駐車場へ向かい始めた3人を引き留めた。

彼女のその目には、薄く輝くものがあつた。

「わ、私も!! 私も連れて行って下さい!!! 秀吉さんと会えなくなるのなんて! 辛すぎます!!!」

「!? ね、ねね殿?」

ねねの、突然の呼び止めに、信長達3人は足を止め、その場に立ち尽くす。

秀吉は、ねねの突然の呼び止めに驚いていた。

当の本人は、自分がとんでもない事を口走った事に気がついたのか、はっ! と顔を上げると、

「あ、じゃなくて!! 私も海軍への配属が夢なんです!! どうか! 私も信長様の弟子にしてください!! お願いです!!」

ねねは、顔を真っ赤にしながら、本心ではない海軍配属への動機を適当にあつらえ、嗚咽のように述べた。

あらかた言い終えると、

腹に手をあて、90度まで上半身を倒した辞儀をしながら、お願いしますと、さらに頭を下げた。

ねねの唇は、血が出るほどまでに強く噛み締められていた。

ねねは、信長の言葉を、同じ姿勢のまま待ち続けた。

しばらくの沈黙の後に、信長が言葉を掛ける。

「よかろう。ねねよ、お主を弟子に貰おう。これから宜しく頼む。」

信長は、ねねの申し出を待ちかねていたかのように、ねねの弟子入りを快諾した。

「え、えええ!? ほ、本当によろしいのですか?!」

「うむ。」

実はのう、余はお主を初めて見た時に、未知数の才を感じていた。

もし、お主が余の下でその才を振るう者で在るならば、何かしらの事をキツカケに、余の弟子入りを願うだろうと信じていた。

余は、天にそれを委ねたのだ。

その結果、お主は余へ弟子入りを願った。

まさか、秀吉が引き金になるとは思わなんだがな。」

信長は、穏やかな表情を浮かべながら2人をからかう。

信長は、優れた先見の明の持ち主で、ねねと初めて会った瞬間に、未来の海軍士官の姿を観ていたのだ。

「あ、あああ！　ありがとうございます!!

私に、信長様の期待に添えるようなモノがあるどうかはわかりませんが、精一杯精進いたします!!」

ねねは、弟子入りできた事を確認し礼を述べると、3人の後を付いていこうとした。しかし、信長はこれを制止し、ねねの正式な弟子入りは、高校を卒業した後での話だということ告げた。

「え!?　そ、それでは私は秀吉さんに会え!!

あ!　差をつけられて置いてかれています!!　そんなの、耐えられません!!」

「うむ、ねねよ、すまぬがそれだけは譲れんだ。その代わり、このバッチを授ける。」

信長は、先程の手帳から、コイン程の大きさのバッチを取り出した。

ねねは、これを受け取った。

「これはな、余の弟子達全員に授けているバッチでな。

余の元帥府（信長の寝泊まりしている宿舎）への自由な立ち入りを可能とするものだ。

秀吉は、これから余とその他の弟子達と共に生活をし、通学をすることになる。

それ故に、この蜂須賀には当分帰っては来れぬ。

で、あるから、お主が秀吉に会いにくるが良い。

そのバッチのおかげで、お主は何時でも、会いたい時に秀吉と会えるのだ。

気に病むでないぞ？」

「は、はい！ 毎日伺わせて頂きます!!」

信長は、秀吉に聞こえぬ声量で、以上の事をねねに伝えた。

ねねの表情には、喜びの感情で溢れているのがわかるほど、幸福顔をしていた。

バッチを渡した信長を先頭に、恒興と秀吉を合わせた3人は、駐車場へ向かった。

見送りを終えた訓練生達と、木下食堂のねねたちは、次第に散り始めた。

ねねは、信長から頂戴したバツチを手のひらににぎりしめ、目の前に広がる美しい海、顔負けの満面の笑みを浮かべながら、店内へ入っていった。

次回に続きます。

秀吉編 海軍士官学校 入隊式

今から40年前の、信長と秀吉の出会いから話を戻し、秀吉の海軍士官学校配属初日と、「海軍特別年少兵制度」について話そう。

海軍への入隊試験は、本来、推薦を受けた現役の帝国軍人のみが、受験を許可されている。

信長は、自ら選び抜いた「元帥の弟子」達を、「織田軍↓帝国軍↓帝国海軍」という過程を経ずに海軍に入隊させる方法として、既存の入隊制度に加え、「海軍特別年少兵制度」なるものを、新たに成立させた。

これは、弾正忠大学の特待生の過程を終了した卒業生に適用され、試験に合格すれば、大学を卒業して、そのまま海軍士官学校へ入隊となる制度だ。

前にも記述したが、弾正忠大学の教育カリキュラムは、帝国軍人に対して行われる教育を前提としており、一般入試で弾大へ入学した学生も、卒業する頃には、帝国軍人と差ほど変わらない「知識」が身に付いている。

信長に見出され、特待生として弾大へ入学した「元帥の弟子」達には、帝国軍人と全く同じ内容の教育と、厳しい訓練が実施される。

それゆえに、彼ら特待生が大学を卒業する頃には、「知識」も「肉体面」も「精神面」においても、帝国軍人そのものの状態といえる。

秀吉は、この過酷な大学生生活を送り、見事、特待生として弾大を卒業。

超難関の「海軍特別年少兵入隊試験」を受験し、見事合格。

秀吉は、海軍士官候補生として、

「尾張海軍士官学校」へ配属となった。

秀吉が耐え抜いた、地獄のような大学生生活は、後程紹介しよう。

海軍士官学校へ配属になった者達が受ける最初の訓練は、身体測定から始まる。

訓練学校配属初日の午前、

身長、体重、肺活量、体内貯蔵心力量、視力検査、聴力検査などを受け、昼休憩を挟んだ後に、体力検査を受ける。

この体力検査がまたキツイもので、多くの新人を苦しめるものとなる。

その内容は全体の体操から始まり、短距離走、長距離走、走り幅跳び、腕立て伏せ、腹筋、背筋力の測定、障害物を利用したコースのクリア時間の記録測定などが含まれる。定められた基準点に達しないと、基準点に達するまで延々と測定されるのもあって、訓練生活における最初の試練と言えよう。

以上が、初日の訓練日程だ。

無事に検査測定を終えた訓練生達には、衣囊（いのう）と呼ばれる、海軍勤務で使用する全ての衣類が入った布製の袋が支給される。

中には、透明なビニールに包まれた第一、二種軍装の、夏服と冬服がそれぞれ二着ずつ、訓練服として、伸縮性、通気性の高い長袖シャツ長ズボン、運動用として半袖シャツ短パンがそれぞれ三着ずつ、シャツ（夏冬用）が四着、作業用つなぎ二着、腹巻き一、靴下八、毛布大小各一、軍靴二足、制帽一、戦闘帽子一である。

これらが収まった衣囊袋は、かなり頑強に作られており、ナイフや拳銃弾程度ならば、容易く防いでしまう。

これだけの官品（国から支給される装備品）を納めるだけあり、衣囊は嚴重に施錠する事が可能で、盗難防止に大いに役立つている。そのため、この頑強さが求められるの

は必然的ではある。

下着類や歯ブラシなどは、私物から使用することになっており、唯一、紛失しても始末書を書かないですむものだ。

官品の紛失をした場合は、始末書と共に鉄拳制裁が待っている。

海軍での生活の上で、この衣嚢には、与えられた官品（一種、二種軍装は個人ロッカーで管理）と、筆記具、私物等が納められる。

つまり、自分の財産の殆どが、常時この衣嚢に入っていることになる。

—————入隊式典—————

測定が終わり、日が落ち始めた頃。

無事測定を終えた新入訓練生達は、訓練場の一角に設けられた温泉施設で汗を流し、各々、訓練学校の玄関前に設けられたテントに集合し、自分の名前が書かれた衣嚢を受け取る。

衣嚢を受け取った訓練生達は、下駄箱がある昇降口を見て右側にある階段を、衣嚢袋を肩に担いで駆け足で上がり、三階の更衣室に向かう。

更衣室では、すでに待機している教官の指導によつて、私服を全て脱ぎ捨て、支給された第一種軍装の着装を命ぜられる。

さすが、選び抜かれた帝国軍人の集まりなだけあつて、着装を素早く完了したその姿は立派なものだ。

立ち振る舞いだけは、一人前の海軍士官そのものだ。

制服を受け取つた秀吉は、真っ白な第二種軍装をその手に取つた時の感動は、想像を絶するものだったろう。

40年前に見た登舷礼で、あの場で海軍士官達が着ていた軍装と同じ物が目の前にあるのだから。

しかし、着装を命ぜられたのは一種軍装。

二種軍装は、しばらくはお預けだ。

「うおおお!! オイラは遂にやつたぞおー!! やつと海軍の一員になつたでさあ!!。」

秀吉は、体育館へ移動が始まる少しの休憩の間にトイレへと立ち、トイレの窓を開け、胸一杯にさげんだ。

薄闇が辺りを支配し始めた周辺に、秀吉の声が響きわたり、注目を集める。

秀吉はその様子に気づいたのか、我に帰り頬を赤らめる。

「おっと、いかんいかん。更衣室に戻るできあ。」

「相変わらず騒がしいのう、秀吉。」

「!? の、信長様!? あ、いや、これはそのう。」

秀吉がトイレから出ようとしたその時、海軍士官学校入隊式の挨拶に訪れていた信長が、秀吉の声を聞きつけたのか、トイレの出口に姿を現していた。

秀吉は驚きのあまり、直立不動の姿勢で固まっていた。

「お主が待ち望んだ軍装、着心地はどうであるか？ さぞ、胸が熱くなっているであろう。先程の雄叫びに、それが見られる。」

信長は、自分の弟子の晴れ姿を見、喜びに笑顔を見せながら言葉を掛けていた。

嬉しいのは、秀吉だけではないのだ。

「へい!! それはもう、感動に打ちひしがれているでさあ!! 全て、信長様のおかげでさあ!!。」

「うむ、余もお主の軍装姿を見て感動しておる。お主は誰よりも、修行に真摯に励んでいたからのう。」

余は、お主のその姿をよく見ておったぞ。」

「は、はいでさああ! これからもよろしくお願いでさあ。」

秀吉は声を震わせながら、信長へ感謝の言葉を送った。

過去の修行を思い出し、辛かった日々を乗り越えた秀吉には、信長の労いの言葉は心に深く染み渡ったことだろう。

そんな二人を余所に、秀吉を呼ぶ声が廊下に響いた。

「秀吉ー!! どこにいるんだあ!! 休憩は終わりだぞお!!」

「うむ? あの声は勝家か、久しぶりに顔を見るとしよう。」

秀吉が利用したトイレは、階段の直ぐ脇にあるため、よく、階段から上がってきた人と接触しやすい状況にある。

教官は、秀吉がトイレにいると聞きつけ、駆けてきた。

「秀吉、ちと勝家に挨拶をしてくる。

お主もお呼びのようであるから、共に参ろう。」

「はいでさあ!」

二人はトイレから出て、下階の集合場所へ向かった。
すると。

「秀吉ー!!! ん?」

「うむっ…」

先頭を歩いていていた信長と、下階から上がって来た勝家が、周囲に聞こえる程の、
ゴン!! という鈍い音を立てて、互いの頭を打ちつけた。

この接触で、勝家は後方に尻餅をついた。

「うぐっ! 痛っう!! 誰だ!! こんなぶつかりやすい所を、あ、る、???」

!? の、信長様!?! ここ、ここ、これは大変な粗相を!! 申し訳ございませんぬ!!
お怪我はございませんか!?!」

勝家は、自分がぶつかった相手が信長と理解すると、尻餅をついた態勢から即座に、痛む額を、下階まで突き破る勢いで床に打ちつけ、信長へ粗相の御免を願う。

「うむ、心配するな、大丈夫だ。」

お主は大丈夫か？ 勝家よ。」

一方の信長は、身体の大きい勝家と接触したにも関わらず、その場から微塵も動いていなかった。

秀吉から見ると、まるで信長が勝家を弾き飛ばしたかのようなようであった。

「いえ、とんでもない！ 私ごときの頭などなんともないです。」

とは言うものの、勝家の額は赤く染まっており、見た目かなり痛そうだ。

「そうか？ かなり痛そうに見受けられるがのう。」

ひとまず、余は大したことない。安心せよ。」

「ははー!! 寛大なるご処置、痛み入ります。(まるで、巨岩に体当たりしたかのようなようだが、弾正忠の肉体。)」

「して、勝家。」

この秀吉を探しておったのであろう？ すまぬな、余が引き止めていたのだ。用はもうすんだゆえ、連れて行ってくれ。」

「はは！ 信長様のご用件とあらば、例え何時間といえど、お待ち致します。」

それでは、秀吉をお連れしますゆえ、これにて。」

勝家は、信長に、脱帽時の敬礼（背筋を伸ばして腰を素早く後ろに引く）を送り、秀吉を連れて下階へ降りていった。

その道中。

「うう！」

勝家は、階段の途中で急によろめいた。

秀吉は慌てて勝家を支える。

「!? だ、大丈夫でありやすか!？」

秀吉は、血の気の引いた勝家の顔を見て、全身が粟立つのを感じた。

「あ、ああ。心配するな、少し目眩がしたただけだ。

皆を待たせてんだから、急がんとあ。

勝家は、作り笑顔を見せ、秀吉を安心させる。

「そ、そうでありやすか。」

秀吉は、疑問の表情を浮かべてはいたが、勝家が歩を進めたのに合わせ、秀吉も後に続いた。

一階のロビーに降りた秀吉は、入隊式典が行われる体育館の入り口前に、真新しい第一種軍装に身を包んで整列していた同期生の列に加わり、会場に入場する時を待つ。

「おい秀吉、お前どんだけ長い大便してたんだよ。教官が大変お怒りだったんだぞ。」

秀吉の同期生達が、集合時間に遅れた秀吉をからかう。
その表情は、実に愉快そうだ。

「へ、へい。本当に申し訳ないでさあ。」

ちよつと信長様と話をしていたでさあ。」

「え。」

信長の名前が出た瞬間、同期生から笑顔が消えた。

「お、お前、信長様とどんな関係なんだ？」

同期生は、恐る恐る尋ねる。

「え？ いや、何でもないでさあ。

ただ、トイレですれ違つて声を掛けられただけでさあ。」

秀吉が、「元帥の弟子」であることは、士官学校においても、ごく一部の教官を除いて、極秘である。

これは言うまでもなく、秀吉へ教育を行う教官達への配慮だ。

たとえ、厳しい指導を命令されていても、指導するべき訓練生が信長のお気に入りとなつてしまつては、他の訓練生と同様にとは、いかないだろう。

教官達の、いわゆる特別待遇を防ぐため、「元帥の弟子」達は素性を隠し、あくまで、正規の試験を合格して入隊が決まつた一訓練生にすぎない事になっている。

「ねえ、君はどここの配置（軍艦で勤務する場所）がいいんだ？ 僕はダントツで砲術部が望みだなあ。」

「ほほう！ 砲術部か！ 戦艦の花形部署だもんなあ。俺は耳がいいから、ソナー探知系が向いてるかもな。 秀吉！ お前はどこがいいんだ？」

「オイラか？ そりゃ決まってるでさあ！」

秀吉は腕を組むと。

「オイラは！ 皇国型戦艦の艦長になるでさあ!!」

皇国型戦艦とは、天界海軍の巨大な軍艦を参考に計画されている戦艦のことで、現段階では計画中であり、建造すら始まっていない。

信長達が天界で見て来た帆船で、最大のもので、全長650メートル、最大幅120

メートルという、もはや、島そのものと思う程に巨大な帆船があった。

信長達は、その規格外の帆船を見ただけで、腰を抜かしたようだ。

天界には、人間界とは比較にならない程の強風が吹くため、このような帆船も成り立つが、人間界に吹く強風程度では、数メートルと動かぬだろう。

信長は、帝国全土の科学者を集め、巨大な船体を動かせる程の推進力を持ったエンジンの開発を、巨額の報酬を支払い、取り組ませている。

「皇国型ねえ、実現できんのかね？ 帝国の優秀な科学者達が総出を振って開発してるみたいだが、俺は難しいと思うな。」

「僕もそう思うね。完成したら、それはとんでもないことになりそうだけど。」

ちなみに、皇国型戦艦の情報は、最重要機密の対象であり、外部に情報を漏らした者は、即、軍法会議に掛けられ、極刑となる。

士官学校内部であるからこそその会話であることを前提として頂きたい。

「……！……！！ 一号艦（皇国型戦艦一番艦の事）の話は大っぴらにするんじゃない！！

「へ、へい!! 申し訳ないでさあ。」

「そろそろ入場だ。」

全体!! つけえ!!!
「

教官の号令で、整列していた新入生達は背筋を伸ばし、式典会場の扉が開くのを待つ。すると、会場内部から、軍艦マーチの演奏が始まり、それと同時に扉が開け放たれた。扉から流れてくる華やかな演奏が、新入生達を包み込む。

「全体ー!! 進めえ!!」

またも教官の号令が掛かると、一列目から順々に体育館内部へ入場していく。

訓練生達の、その堂々たる行進は実に見事なもので、手足の動き、歩行の速度まで綺麗に揃っており、見る者に感動すら与えた。

「(うおー!!) これが軍艦マーチかあ!! なんと力が湧き出てくる演奏でさあ!!」

式典会場内部に響き渡る、

帝国海軍行進曲「軍艦」を全身に受けながら、秀吉達新入生は、会場ステージ前に設けられたパイプ椅子へ向けて行進していく。

パイプ椅子の周囲は、祝いの花で埋め尽くされていた。

軍艦マーチの演奏を手掛けるのは、艦隊司令部所属の軍楽隊だ。

軍楽隊の演奏は、聞く者を虜にしてしまう程で、世界コンクールなどでは、常に優秀賞を取り続ける。

海軍の兵士達は、入隊式でこの演奏を全身に受けた時、自分は本当に海軍の一員になったと自覚する者が、かなり多い。

新入生全員の入場が終わり、演奏が終了した。

着席の号令が掛かり、新入生達はパイプ椅子に腰を下ろし、元帥、信長の登壇を待つ。

軍艦マーチの演奏で賑やかだった館内は静まり返り、信長の挨拶を待つ人々には、緊張が走っていた。

「（すげー演奏だったなあ！ 俺もこれで海軍になった実感が湧いてきたぜ）」

「（たしかにな！ 耳だけじゃなく、身体のコにまで響くすげー演奏だったな！）」

新入生達は、司令部所属の軍楽隊の演奏の余韻に浸り、小声で言葉を交わす。

そこへ。

「ただいまより、弾正歴2870年、大弾正忠帝国海軍、第100回、尾張海軍士官学校の入隊式典を、開催いたします。」

式典に先駆けまして、海軍元帥、織田信長殿下より、御言葉を賜ります。

織田弾正忠信長様、登壇！！」

進行役が信長を呼び、ステージ裏に待機していた信長が、華やかに彩られたステージ

上に登場すると、会場より大歓声が沸き起こった。

わああああああああ

!!!!!!

信長様~~~~~!!!!

元帥閣下~~~~~!!!!

信長は、ステージ上に設けられた演説台に登壇すると、右手を上げて歓声をおさめる。

「ただいま紹介にあずかった、織田信長だ。

新入生の諸君、今回の入隊、実に見事だ。

諸君らが、どれだけの苦勞をし、ここに座っているのかを、余は理解している。

これから諸君らは、余の直属の部下として、帝国のため、愛する者のため、その命を懸け、軍務に着手していくことになる。

我ら帝国軍人は、国民の盾だ、帝国という玉を守る駒だ。

帝国が窮地に陥った時は、真っ先に命を張って闘う戦士なのだ。

その戦士になるためには、厳しい訓練が必要だ。

これから三年間、諸君らは厳しい訓練に耐え、卒業すれば、即実戦配備となる。」

信長が演説を行っている間の会場には、信長の声以外響くものがなく、新入生や、その他の出席者の耳に、心に、信長の声が浸透する。

「我が帝国海軍が設立され、今年で1000年目だ。

そして諸君らは、記念すべき1000期生だ。

海軍設立当初は、1000人にも満たない、小さな軍隊であったが、今や、1000万を超える大所帯となった。

しかし、広大な帝国の領土を守るためには、まだまだ足らぬ。

途中除隊は、勘弁であるぞ？」

会場から笑いが起こった。

なぜなら、海軍設立から今日までに、訓練中における死亡を除いては、1人も海軍を辞めた者がいないからである。

「諸君らと、共に戦える日を楽しみにしている。以上だ。」

「起立!!」

号令が掛かり、新入生達が一斉に立ち上がる。

「元帥に対し——!!
敬礼!!!!
」

新入生達は、壇上の信長へ、海軍式の敬礼を送った。

信長は、「うむ。」と言うと、これに返礼し、腕を下ろした。

「直れ!!!」

信長の返礼が終わると同時に号令が掛かり、全員が腕を下ろした。

その後は、海軍のお偉方や弾正忠家の役員やらの挨拶が終了し、入隊式典は、恙無く終了した。

「新入生退場」

進行役の言葉で、再び軍楽隊の演奏が始まった。
新入生は、入場時と同様の行進で、会場を後にする。

式典を終えた新入訓練生達は、士官学校居住棟四階にある多目的ホールに集められ、自分の属する班の割り振りを受ける。

教官の点呼で、訓練生達は威勢の良い返事を返し、教官の下に駆け足で向かう。

「尾張海軍士官学校 100期生 第一班!!」

前田利家!! 丹羽長秀!!

羽柴秀吉!! 滝川一益!!

松平家康!! 前え!!!」

名前を呼ばれた5人は、腹から返事をし、駆け足で集合した。

「お前達が、記念すべき100期生の第一班だ。

ちなみに、この羽柴秀吉は弾大の特待生の過程を終了し、海軍特別年少兵試験を突破してきたエリートちゃんだ。

年もまだ130。

皆、可愛がつてやってくれよ？」

教官は意味深な笑顔を5人に向けると、直ちに5人を整列させ、次の班分けを発表する。

班分けを終えた訓練生達は、各々の衣嚢を肩に担ぎ、自分達が寝泊まりする居住棟へ案内された。

訓練生達は、夕食まで、自由な時間を過ごす。

班分けされた訓練生達は、大抵は、自己紹介をしながら時間を過ごした。

「初めましてでさあ!! オイラは、羽柴秀吉と申すでさあ!!」

弾正忠大学を出たばかりの若輩者で、迷惑を掛けてしまうかもしれないですがあ、よろしくお願いしますでさあ!!」

秀吉は、快活な挨拶を4人に送った。

「お前が秀吉か！ まさか俺の班になるとは思わなかったぜ。

俺が、お前達の班長の前田だ！ 大学は美濃大出身で、卒業後に織田軍へ入隊。最終的に、帝国軍本部の参謀を勤めていて、元の階級は少佐だった。

よろしくな!!」

「私は丹羽長秀だ。

この前田と同期で、階級も一緒だった。

よろしく願う。」

「拙者は滝川一益と申す。帝国軍、堺基地勤務で警備をしており、いまに至り申す。どうか、お見知り置きを。」

「それがしは、松平家康。帝国軍時代の階級は中尉。

海軍への強い憧れがあつて、今、相当な感激を抱えている。よろしく。」

秀吉達は自己紹介を終え、夕食まで談笑をして過ごした。

しばらくすると、館内放送で、夕食の案内が流れた。

放送が流れると、各班は自室から出て、扉の前で整列し、一斉に食堂へ移動する。

「海軍の食事は、かなりの豪勢ぶりだと聞いてるでさあ！ 楽しみでさあ！！」

「秀吉殿、拙者も同じ気持ちでござる。

拙者の部署は、任務の特性ゆえ、食事は簡素なものでござつた。」

そんな会話をしながら、秀吉達は四階の居住棟から一階の大食堂に到着。

今夜は、入隊祝いということで、新入訓練生達の食事は、最高級ランクのサーロインステーキのフルコース料理が提供された。

訓練生達は、その美味しさに感動し、明日からの厳しい訓練を控え、その士気を存分に上げているようだ。

食事を終えた訓練生達は、自分達の部屋に戻り、夕食の感想を述べた。

しばらくの談笑の後に、ある放送が流れた。

「明日の起床時間を伝える。

午前5時に起床、なお、起床時間になった際は、全館に起床ラッパが鳴り響く。

この起床ラッパが鳴り終わってから二分以内に、訓練服への着装を完了させよ。

放送は以上だ。総員、夜更かしはせず、明日からの厳しい訓練に備え、十分な休息と体調管理を取るように。」

ザザ、という音と共に、放送が終了した。

いよいよ、訓練生達に初めての訓練が実施される。

地獄の訓練の様子は、次回へ続きます